

文献紹介

青梅鉄道史料調査会

『青梅市史資料集第53号 青梅鉄道史料目録』

青梅市教育委員会刊 2006年3月

A4版 185頁 2,000円

本書は、1944（昭和19）年に国鉄に統合された青梅電気鉄道株式会社に関連する6,072件・2万点を超す資料群の目録である。この資料群は1994（平成6）年までの約50年間、世間の関心を引くことなく、国有化当時の社長であった山崎家と、本社社屋でもあった青梅駅の地下室の両所に保管されていた。これが、同年、青梅市郷土博物館が開催した「青梅鉄道100年展」で一部が紹介され、翌年に博物館へ寄贈されたことから、調査・整理が開始され、その成果として刊行されたものである。この資料群の調査は、一般的な自治体博物館で行われる形態とは異なる手法が採られた。すなわち、博物館学芸員を中心とする調査員が専従してあたるのではなく、在野の研究者7名（彼らは研究職を専業としないメンバーでほぼ構成される）が「青梅鉄道史料調査会」を組織し、月に1～2回の研究調査会を重ねて来た聞き及ぶ。このような手法は（資料群が膨大なボリュームを有することもあるが）、刊行まで10年におよぶ調査期間を要し、速報性の点では問題が有るのかもしれない。しかしながら、昨今の自治体博物館の置かれている現状を考えると、不十分な予算から収集・保存、調査・研究、展示・教育の三領域におよぶ活動が充分に行えず、ともすると寄贈史料が死蔵されてしまうケースも少なくなかろう。専門職として学芸員を雇用していないケースも多く、上記三領域に亘る活動を、専門的かつ継続的に行いがたい。これらの問題点を解決しつつ、着実な成果を本書の公刊を以て示した青梅鉄道史料調査会の面々に素直に敬意を表したい。地方史研究がアカデミズムの世界に包摂されて久しいが、依然として彼らのような在野の研究者によって支えられている部分が少なくないことを改めて感じさせられた。

さて、本書の内容であるが、以下の大分類—中分類が行われている。

- 00 総合 (01 定款, 02 営業報告書・精算報告書, 03 株主総会・精算報告会, 04 その他)
- 10 組織管理
- 20 運輸営業
- 30 運転
- 40 施設
- 50 車両
- 60 電気
- 70 付帯事業 (71 石灰石, 72 砂利, 73 観光・行楽, 74 自動車)
- 80 関連会社・他企業・諸団体 (81 西武興業, 82 奥多摩振興, 83 奥多摩電気鉄道・御嶽登山鉄道・奥多摩自動車・奥多摩相互自動車, 84 他企業, 85 官庁・諸団体, 86 地域史料)
- 90 その他

さらに史料の形態による小分類（文書、図書・カタログ、写真・絵葉書、ポスター・ちらし、地図・図面、物品）を加え計79項目、6,072件の分類が行われている。この分類方法をみると、随分と苦勞したであろう事が伺われる。近世地方文書の分類によって構築されてきた、「支配」、「土地」、「貢租」にはじまる分類手法が、ほとんど適用できず、かつ依然として、近代の企業資料群の統一的な分類手法が構築されていないため、手探り状態で目録の作成が行われたであろうことは、想像に難くない。例えば、各史料には、それぞれ、2つの異なる番号が付されている。まず史料が長らく保管されていた木製の収納函に01～22までの番号を付け、各資料の収納されていた状態を復元できるよう整理番号が与えられた。後にこれを精査し、目録上の番号を、上記分類に基づいて行っている。収納函は、ひとつずつ大きさが異なり、収納する資料に合わせて作製された特注品であったと思われることから、このような手法を採用したのであろう。

各地に存在した鉄道関連の経営史料は、戦災や管理者の不在などにより散逸してしまっていることが多く、ひとつの鉄道事業者の変遷を示す史料が体系的に残っているのは、1985年3月に廃止

の加悦鉄道と、2007年3月に廃止のくりはら田園鉄道が知られているが、戦時買収された鉄道事業者に関する資料群が残されていたことは、今後鉄道史のみならず、地域経済史、産業考古学・技術史の観点から極めて貴重な資料といえるであろう。特に青梅鉄道の場合、鉄道事業のみならず、付帯事業に関する資料群が豊富である点は高く評価できる。大正～昭和期の行楽ブーム期に作成された絵葉書・ポスター、観光案内所の類や、スケート場・行楽施設に関する史料が豊富に残る。この他、バス事業者の体系的な史料も含まれており、おそらくは、バス事業者の資料群が発見された初めてのケースであろう。本資料群は、ようやく目録が整備されたばかりであり、これを利用した研究はこれから始まるのであろう。従来の鉄道院文書や、府県に残される公文書類からは解明不能であった、ミクروسケールでの分析が可能になるであろう点について、今後の活用が望まれる。と、同時に、今後発見され整理が進められるであろう、各事業者を単位とした資料群の目録整備事業において、本目録が範とならんことを期待する。

(天野宏司)

葛飾区郷土と天文の博物館

『かつしかブックレット15 帝釈人車鉄道』

— 全国人車データマップ —

葛飾区郷土と天文の博物館 2006年3月

A5横版 96頁 600円

本書は葛飾区郷土と天文の博物館（東京都）が発行する「かつしかブックレット」の一冊であり、同博物館が2004年10月～12月に開催した企画展「帝釈人車鉄道 — 人車のゆくえを追って —」の展示と催事の成果をふまえたものである。帝釈人車鉄道は経栄山題経寺（柴又帝釈天、日蓮宗）への参拝者の足として、1899（明治32）年12月～1912（大正元）年8月に金町～柴又間を軌間610mmで運行していた。1899年にはすでに日本鉄道土浦線（現JR常磐線の一部）の金町停車場¹⁾が営業していたこともあり、土浦線と帝釈人車鉄道を利用して経栄山題経寺へ向かう参拝者が多かった。なお、本書の企画・編集では、同博物

館学芸員で歴史地理学会会員の橋本直子氏が中心的な役割を果たされたうえ、本書の第1章と第3章、資料編の第2章、展示抄録を執筆された。同氏に敬意を表したい。

(目次)

1. 人車鉄道の時代
2. 帝釈人車鉄道
 - ① 題経寺と帝釈人車鉄道
 - ② 京成電気軌道株式会社への譲渡
3. 人車のゆくえを追って
 - ① 笠間人車軌道
 - ② 松山人車軌道

資料編

I 帝釈人車鉄道

- ① 明治35年備忘録
- ② 帝釈人車鉄道関係文書目録

II 全国人車データマップ

- ① 人車軌道
- ② 専用軌道・その他

展示抄録

（構成・内容において、1～3は「本編」と考えられることから、文献紹介では1～3を「本編」として扱うことにする）

まず、本編をみていくことにする。

「1. 人車鉄道の時代」では、まず人車鉄道を「人が動力となって線路上の車両を押す（鉄道）」と定義している。日本における人車鉄道は29箇所が確認されている。1891（明治24）年の藤枝焼津間人車軌道（静岡県、旅客・貨物（農産物）輸送）の開業をはじめとし、1959年の島田軌道（静岡県、貨物（木材）輸送）の廃止まで、人車鉄道は旅客・貨物輸送に貢献した。しかし、その全盛期は明治30年代～大正前期にすぎなかった。帝釈人車鉄道はこの全盛期に当てはまる（日本における人車鉄道は資料編「II 全国人車データマップ」を参照）。この章では、帝釈人車鉄道の絵葉書のほか、豆相人車鉄道（神奈川県、旅客・貨物輸送）の写真や東葛人車鉄道（千葉県、旅客・貨物（農産物）輸送）の路線案内図なども掲載されている。絵葉書にも使われた柴又停車場構内の写真には、マッチ箱のような人車、押夫、乗客のほか、経栄山題経寺と門前町の建物、門前